

入選

地域を良くする親切

福井県 気比中学校 3年 羽根 聡一朗

僕の家の前には公園がある。いつもごみ一つ落ちていない大きくてきれいな公園だ。物心ついてから、この景色は当然のように毎日続いている。しかし、僕はあるできごとによって、あたりまえの光景があたりまえではないということに気づかされた。

先日、僕は友だちといっしょに、ある公園に遊びに行った。その公園は、汚いというほど汚くはなかったが、多くの雑草が生えていて、少しごみが落ちていた。ごみは落ちていたが、僕たちは落ちているごみを気にすることなく遊んだ。すると、半袖に長ズボンの格好に軍手をし、ひばしとバケツを持った一人のおじいさんが公園にやってきた。

おじいさんは暑い中、右手にひばしを持ち、ごみを拾い、バケツに入れ始めた。公園からごみがなくなると、おじいさんは汗をぬぐい、雑草を抜き始めた。それを目にした僕は、こんなふう公園を掃除してくださる人がいるから、公園がきれいに保たれているのだということに初めて気づかされた。

ニュースでは、熱中症で倒れて病院に運ばれる人が多発していると報道され、中学生でさえ暑さに負けそうな中で、当然のように公園をきれいにしてくださるおじいさんの姿に、僕は心を打たれた。このような人の少しのボランティア精神によって、公園が守られているということに、僕は驚いた。

そして、僕も同じような行動を試みることにした。すると、家の前の公園に高校生たちがたくさんのごみを捨てて帰っていた。最初はやる気にあふれていて、「みんなのために公園をきれいにしてやる」という気持ちでごみ拾いを始めた。けれどもごみを拾うにつれて、体がだんだんと重くなっていった。それでも、ごみ拾いを終えて、公園が元のきれいな公園に戻ったときは、とても気持ちがよく、達成感を味わえた。

その一方で、大きな疲労も体に残った。僕は、達成感や充実感を得られて、いい仕事をしたなと思ったが、もうこれからは、このようなことはしたくないなと思った。このとき、おじいさんがあたりまえのように公園を掃除していたことにすごさを感じ、敬意を払い、そして感謝したいなと思った。

僕は、この経験を通して、ボランティア活動している人や公園などを清掃してくださっている人は、まわりの人を第一に考え、まわりの人を幸福にしてくださる本当にすばらしい人だなと思った。改めて、このように活動してくださる方々に感謝したいなと思った。

一人の小さな親切の積み重ねが、地域をよくしていく。僕も、自分のできる小さなことから始めて、周囲に気づかれなくても、まわりの人たちを幸せにできる親切ができる大人に成長したい。そして、地域をよくしていきたい。